

平成30年度学校自己評価(最終評価)

<p>中長期ビジョン (学校ビジョン)</p>	<p>「一人ひとりの生徒を大切に」を教育の根幹におき、勤労と責任を重んじ、心身ともに健康で地域産業及び社会の発展に貢献できる人材を育てる。</p>	<p>本年度 重点目標</p>	<p>(1) 専門教育の充実 ～授業実践及び県版SPHの取組をととして「学びの質」をあげる。資格取得の推進～ (2) 学力向上 ～基礎学力の定着、授業力の向上～ (3) キャリア教育 ～進路指導の充実、職業観・勤労観の育成～ (4) 生徒指導の充実 ～規範意識の醸成、基本的学習習慣の確立、家庭との連携～ (5) 心の教育 ～自己理解・他者理解に基づいた人間関係づくりを支援、自己肯定感の育成、健やかな体づくり～ (6) 生徒支援の充実 ～教育相談、特別支援教育及び人権教育のより一層の充実～ (7) 地域連携の充実 ～地域の教育資源を活かし、本校の教育資源を地域に活かす、顔の見える地域連携、広報の充実～</p>
-----------------------------	---	---------------------	---

平成30年度当初				評価結果 1月				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	備考
1 専門人材育成の充実	○地域の産業界や教育機関等と連携し、多様な知識・技術や専門的な資質・能力を習得させる。	○資格取得に向け積極的に取り組む生徒もいる中、消極的な生徒もおり、意欲の喚起と学力の底上げの必要性を感じている。	○個々の将来の目標を定め、より意欲的に学習に取り組み、専門性を活かした資格取得に励んでいる。資格取得の合格率が前年度比10%以上向上した。 ○上級学校への進学を目指し、意欲的に専門的な資質・能力を習得し、将来の地域を担うリーダー的存在を輩出している。 ○「県版SPH事業」や「スーパー農林水産業士制度」を有効活用し、学校と地域産業のより一層の連携が図られている。今年度、「スーパー農林水産業士」の認定者が3人以上となった。	○先進校視察、上級学校への見学研修および高大連携事業を活用し意欲を持たせ、進学への意欲付けを行う。 ○普通教科と専門教科が連携し、実践的な農業や家庭科目目の学習課題と、普通教科と学習課題を共有し、お互いの効果的な学習指導方法を採り実践する。	○スーパー農林水産業士には4名が認定され昨年度から倍増した。 ○資格取得は昨年度と同程度であった。 ○一部の教科で連携が図られていたが、全体の取組には至らなかった。	B	○1年生全科に対して行った上級学校への見学研修は、進学への意識付けにもなり、今後も継続したい。 ○普通教科と専門教科の連携について学習指導委員会と一緒に議論していきたい。	
	○地域の担い手として意識や自覚を育み、地域に貢献する人材を育成する。	○専門性を活かした地域連携が進みつつある現状であるが、生徒の進路先と必ずしも合致していない。	○専門的な技術の習得に意欲的に取り組み、地域社会に貢献するための素地を身に付けている。 ○農業高校ならではの「ものづくり体験」や「地域交流」体験によって、人間力を高め、より魅力的な人材に成長している。 ○高度な技術を習得することで「自信」を得て、「意欲喚起」が図られている。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者が前年度比10%以上となった。	○キャリア教育の年間計画に従い、3年間で体系化したプログラムを実施する。 ○社会人講師等を積極的に活用し、地域のプロから教わることで技術を習得する。	○昨年以上に、本校の教育と関連した企業への就職が見られた。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者が前年度19%、今年度34%であった。 ○インターンシップにおいても科の学習内容と関連した企業を選択する生徒が増えてきた。	A		
2 地域連携の充実	○地域連携を通して、地域の活性化に寄与するとともに、生徒の全人的な発達を促し、地域に期待される学校を目指す。	○生徒数の減少により、ここ数年取り組んでいる地域連携事業の関わりが限られた範囲となりつつある。	○地域連携事業の活用により、生徒に自己有用感、達成感が生まれ、積極的に学校生活を送っている。 ○地域連携を教育内容に取り入れる専門科目が50%以上になった。 ○地域連携事業の活用結果、個々のコミュニケーション能力が高まり、逞しく成長し、目指す進路の実現が可能となった。	○地域の保育所・高齢者福祉施設との野菜づくり、藍染交流を行い、相手を思いやる心やコミュニケーション能力を育てる。 ○学校や地域で生産される農産物・加工品を町内商店街で販売し生徒のコミュニケーション能力や経営感覚を育成する。	○ちのりんショップは地域に定着しつつある。また、今年度は新たに地元の保育所との菜園活動などを実施している。 ○地域連携を教育内容に取り入れている専門教科は、科によってばらつきがあるものの、今年度は約42%であった。	B	生徒がより意欲的に諸活動に取り組めるよう地域連携活動を改善する。	
	○本校の教育資源と地域の教育資源を活用することで、学校と地域の活性化を図るとともに、学校の特色化を推進する。	○従来から本校の特色・魅力化を推進しているが、立地もあり生徒募集にはつながらない。生徒数の減少もあり、学校の実状に応じた活動のあり方を再構築する時期にさしかかっている。	○地元地域へ本校の取り組みが浸透し評価され、地域からの評価アンケートの満足度が80%以上になった。 ○個々の教員が持っている専門技術や学校の教育力が地域の活性化に役立っている。	○本校の持っている技術力を活用し、棚田の補修、格子の製作に取り組み、伝統的な文化や技術を継承し発展させる。 ○技能フェア、地域のイベント、学校祭を通して体験教室や展示販売を行い学校の専門的知識や技術を地域へ発信する。 ○各種事業で、地域の専門家を外部講師として招聘し、その技術力を本校教育へ活用するとともに、本校の教育内容の理解を促す。	○中学生の体験入学は、参加者が昨年より3割増えた。 ○生徒数が昨年度より少ないが、地域の木女会との技術交流、棚田の補修、格子の製作、藍染のれんの制作などを例年通り実施できた。 ○地域連携活動の評価アンケートは88%の回答が「よい活動である」との回答で満足度が高かった。	A		
3 学習指導の充実	○「学び直し」に関する授業実践及び学力向上をめざす。 ○協同学習の理念を基盤とした「学びあい」のある授業やICTを活用した授業の取り組みを組織的に進め、学習意欲を喚起することで、総合的な学力の向上をめざす。	○「学び直し」に係る教職員研修会を実施するなど職員全体が授業改善への意識が高い。 ○今後もICT活用等の授業研究を継続し授業改革を推進していくとともに、本校生徒の学力向上につながる学習方法の検討・実践が重要である。 ○校内職員研修会等で授業に関する情報・意見交換が活発に見られ、授業改革につながるが期待される。	○生徒同士の学びあいを授業に組み込み、様々な学習課題に主体的に意欲を持って取り組むことができる。生徒の授業アンケートの結果、授業の理解度、分かりやすさや興味等が80%以上になった。 ○地域の現状や文化を理解し、将来地域を担う人材を育成する目的の科目である「基礎基礎」の一層の充実を図り、生徒は地域連携の重要性を理解している。 ○国・数・英の「基礎科目」の研究授業や授業実践報告会を通して教職員各々が授業改善に取り組んでいる。 ○「学びあい」を取り入れた授業の実施頻度が、各教員年間5回以上になった。	○「基礎科目」を円滑に運営し基礎学力の定着、向上に取り組む。 ○授業研究会、授業実践報告会や各種研修会への参加をとおして教員相互の授業力向上を図る。 ○生徒各自の特性や対人関係に配慮した「学びあい」をとおして、生徒の実状に即した学習方法を根柢し授業の改革を進める。 ○学習意欲を高め、「学びあい」の活動を促すためのICT機器の活用方法を検討する。	○「授業を語る会」を職員研修として年間2回(6月、12月)に実施した。12月の会では、本校教員の授業実践の工夫について紹介し、教科を超えた授業改善等への研修を実施した。 ○ICTタブレットの更新、活用環境の改善を行ったことで授業等の場で視覚的資料の提示が可能となった。これにより活用頻度が4倍に増加し、生徒の興味関心が高まった。	B	○更なる活用環境の改善と職員の研修会の確保を継続して行う。 ○校内実力テスト結果活用方法や夏休み中の補習・進学希望者指導等、個別対応から計画的組織対応を進めるための検討を行う。	
4 生徒指導の充実	○生徒自身に気づきと自律を求める指導を行い、社会人・市民として求められる姿勢の育成をめざす。	○指導対象の生徒数は減少しているが、指導内容は多様化しており、家庭や地域、外部機関と連携した指導体制を継続して行っている。 ○生徒一人ひとりを大切にしたい指導を心がけることで生徒理解を深め、いじめや不登校等の未然防止に努めている。	○基本的学習習慣が身につく、落ち着いた学校生活を送るとともに授業規律が確立されている。 ○校則を遵守するとともに、端正な服装・髪型、日頃のあいさつなど自動心がけ行動できる。 ○社会規範や一般常識を理解し、道徳心を持って行動することができる。 ○特別指導を受けていない生徒の割合が90%以上、また、携帯マナー、交通安全に関してルールを遵守している生徒の割合は90%以上となっている。	○毎朝登校時の立ち番で服装・あいさつ指導を行う。また、PTAによる通学路交通安全指導・あいさつ運動も実施する。 ○授業や集会での授業規律・集団規律を徹底する。 ○いじめアンケートやhyper-QUを計画的に実施し、生徒が抱えている問題の早期発見に努め、生徒理解を深めながら指導する。	○生徒は校則や授業規律・集団規律を守って学校生活を送っている。改善が必要な生徒に対しては、教職員間で情報を共有し生徒理解を深めながら指導を行った。 ○特別指導を受けていない生徒の割合：71% ○携帯マナー(学校評価アンケート結果)：78% ○交通安全マナー(学校評価アンケート結果)：88%	C	○カード指導を活用し、生徒自身に気づきと自律を求める指導を継続して行う。 ○特別指導が必要な生徒に対しては、教職員間の連携を密にして指導を行うとともに、保護者や関係機関との連携を図る。	
5 生徒支援の充実	○学校生活の様々な場面で自己理解・他者理解を促し、人間関係づくりを支援する。また、進級指導の研究・充実を図る。	○本校生徒の実態把握や教職員研修等により、特別支援教育への認知・理解は向上している。 ○通級指導教室の開設により、継続して調査研究を行っている。	○ユニバーサルデザイン化された授業が行われている。 ○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いて学習に取り組んでいる。 ○hyper-QU結果の「学級満足群」に入る生徒の割合が40%以上になっている。 ○通級指導教室の開設およびその運営がスムーズに進行している。	○「授業における必須支援項目」に沿って授業をすすめる。分かりやすい授業を展開する。 ○ソーシャルスキルトレーニングを導入して、生徒の自己理解・他者理解を進める。 ○通級指導の調査研究と並行し、対象生徒の個別対応を行う。	○hyper-QU結果の「学級満足群」に入る生徒の割合が1回目50% 2回目53%(対前年比+15)で、過半数の生徒が学校生活の満足している。 ○ソーシャルスキルトレーニングを導入して、生徒の自己理解・他者理解を進める。 ○通級指導教室を予定通り開設し、運営している。	B	○教職員間の連携を密にして、円滑で有意義なLHR等を継続して企画・運営する。 ○支援をするためのスキルを身につけるために、教職員研修会の内容を検討する。	

評価基準 A:十分達成[100%] B:概ね達成[80%程度] C:変化の兆し[60%程度] D:まだ十分[40%程度] E:目標・方策の見直し[30%以下]